N-004

国宝「一遍上人絵伝」の踊念仏の踊りシーケンスの検討

Study about DANCE SEQUENCE of Odori Nenbutsu in the national treasure "Ippen Shonin Eden" (Pictorial biography of the monk Ippen)

大島 康徳† 長沢 可也†
Yasunori Oshima Kaya Nagasawa

1. はじめに

時宗の開祖一遍の半生を描いた絵巻物, 国宝「一遍上人絵伝」に描かれる「踊り念仏」と呼ばれる僧侶の踊りを描写した絵は, 何故か大人数で踊る僧侶のポーズが不揃いである. 僧侶が, それぞれが自由気ままに踊るのであるならば, 不揃いであっても不思議ではないが, 念仏を唱え, 鐘を打ちながら踊ることを考えると, 全員揃って踊ると考える方が自然である. 鐘を好き勝手に打てば, 他の人の鐘のリズムと自分のリズムが合わずに踊りにくくなるであろう. 国の無形重要文化財に指定される「跡部踊り念仏保存会」による踊り念仏も, 揃って踊っている. 本研究では, 前回の発表[1]に引き続き, 写実性が高いと評価される「一遍上人絵伝」の踊り念仏の踊りが不揃いに描かれている理由について検討を行うことを目的とする.

2. 踊り念仏と絵巻物

一遍上人は, 踊り念仏と言う独自の信仰のスタイルを生み出した人物である. 鎌倉時代に, 時宗と呼ばれる仏教宗派を生み出し, 日本各地を遊行し踊り念仏を広めた事で知られる.

国宝となっている絵巻物は, 一遍の弟子に当たる聖戒と, 画僧の円伊が数名の画家と共に描いたものである. 大別して 2 系統存在し, 円伊らが描いたものが全 12 巻あり, 国宝に指定されているものはこちらである. もう 1 系統は火災により消失している. 12 巻の全長を合わせると 130m にも及び, 写実性が高く文化的歴史的資料として高い評価がされるだけでなく, 芸術作品としての価値も非常に高いとされる.

踊り念仏は, 全部で 6 つの場面に描かれており, 表 1 に, 年代別に示す. 前報 [1] でも注目したのは, 踊りの場面に描かれる大勢の僧侶のうち, 前面に出ている僧侶のポーズである. 舞台で踊る僧侶は, 舞台を時計回りに回るようにして踊っている. ポーズがよく分かる一番外側で踊る僧侶をピックアップすると, その人数は, 表 1 に示すように, 10 人もしくは 9 人となっている. 但し, 踊り念仏の発祥とされる小田切の里の踊り念仏は, 踊る舞台もなく, 時計回りに回るといった形式化されたものでもないので, 前面で踊る僧侶の人数から外して考えることとした. これ以外の 5 つの場面に於いて, 一番外側で踊る僧侶のポーズを以下に示す手法で 3DCG に取り込み, 踊りの振り付けの 3DCG アニメーションを作成し, 検討を行った.

3. ポーズの取得と踊りのアニメーション化

踊りの 3DCG アニメーション化の手順は, 前報 [1] とほぼ同じであり, ここでは簡単に説明する.

踊り念仏が描かれる場面, 一番外周にいる 9 名もしくは 10 名の僧侶に着目し, 時計回りに, 1 から 9, もしくは 10 の番号を付与し, 3DCG ソフトウェアに下絵として取り込む. その後, 3DCG で作成したヒューマノイドモデルを下絵に合わせポーズを取得していく. 各ポーズをキーフレームアニメーションさせることで 3DCG アニメーション化を行った.

本研究の関心とする問題には復元された踊りの順番が妥当であるか検証する事にあり, 先行研究では一連の踊りの順番は僧侶らの踊りの進行方向にそって並べられているのみで, 復元した踊りが本当にその順番なのか確認する必要が認められる.

したがって, 踊りのシーケンスの復元の問題には 3DCG で踊りのポーズを取り込むところまで採用し, ポーズの順番を場面毎に入れ替え, 並び替える事で他に考えられるパターンがないか検証し, 違和感なく再現できているか本研究で補完を考える.

各場面の踊りをポーズ毎にインデックス作成を行う. その後 3DCG ソフトウェアで各アニメーションを作成し, またそれらを容易に確認するために専用の 3DCG ビューアを作成する. 3DCG ビューアには各アニメーションの再生機能や, 360 度全体から踊りの様子を確認できる機能を搭載する. また踊りの速さやタイミングが不明であるため, 再生速度を変更できる機能を有するようにする.

3DCG ビューアを用いてその様子を確認し, 各踊り念仏におけるシーケンスの確認を行う.

表 1 踊りの場面の年代, 場所, 及び, 前面の僧侶の人数

踊りの場面	年代	場所(県, 市)	人数
小田切里の踊り念仏	弘安 2 年 (1279 年)	信濃国小田切の里 (長野県)	×
片瀬の浜の踊念仏	弘安 5 年 (1282 年)	相模片瀬の浜 (藤沢市片瀬海岸)	10
関寺の踊念仏	弘安 6 年 (1283 年)	近江関寺 (滋賀県大津市)	10
市屋道場の踊念仏	弘安 7 年 (1284 年)	京都四条釈迦堂の市屋道場 (京都府)	10
上野の踊り屋の踊念仏	弘安 9 年 (1286 年)	石清水八幡宮上野の踊り屋(京都府八幡市)	9
淡路の二の宮の踊念仏	正応 2 年 (1289 年)	淡路の二の宮 (兵庫県)	9

†湘南工科大学

Copyright © 2016 by
The Institute of Electronics, Information and Communication Engineers and
Information Processing Society of Japan All rights reserved.

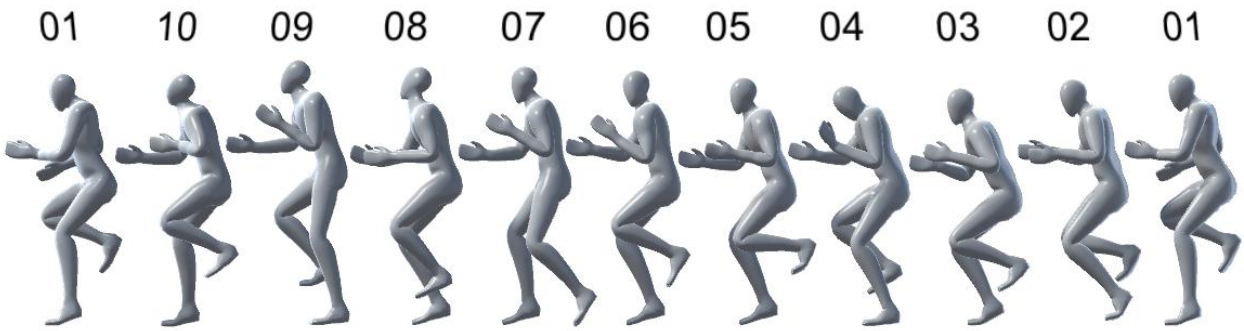

図 1　片瀬の浜の踊り念仏

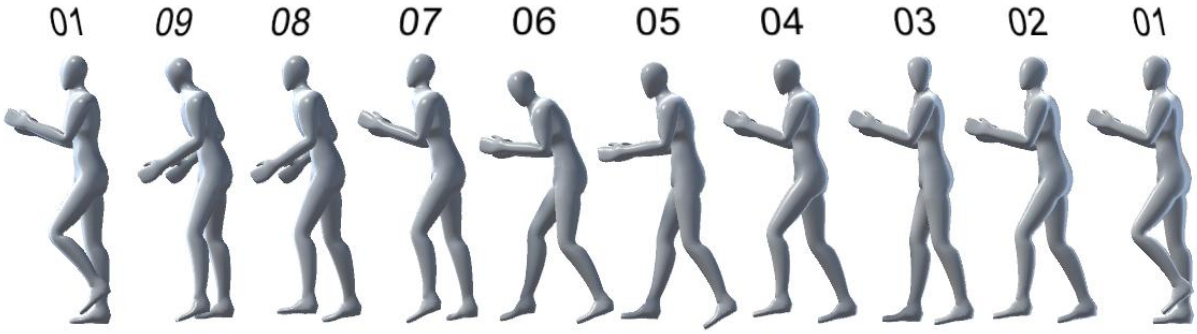

図 2　淡路の二の宮の踊り念仏

4. 結果及び考察

図 1, 2 に, 片瀬の浜と淡路の場面の踊りを真横から見た図を示す. 両図を比較し明らかな事は, 図 1 では, 膝が曲がったポーズが多く, 図 2 では, 膝が伸びたポーズが多いことである. それぞれのポーズをつないだアニメーションを見るとさらにはっきりわかるのであるが, 図 1 は, 動きが激しく, 図 2 は, 歩いている状態に近い, ということである. 踊り念仏が発祥した小田切の里の場面では, 統一的な踊りは完成しておらず, ここでの議論から除外するが, それ以降の踊り念仏は, 踊りの形式化が確立され, さらに人に見せるための舞台も用意し, 完成した踊り念仏となっている. しかし, その踊り念仏は, 時とともに大きく変化していくことが, 図 1, 2 から, 明らかとなった. 図には示さないが, 片瀬の浜に続く, 関寺と市屋道場の踊り念仏は, 片瀬の浜と同様, 動きが活発であった. 一方, 上野の踊り念仏は, 淡路と同様, 動きが小さくなっている. 動きの激しい片瀬の浜, 関寺, 市屋道場では, 外周の僧侶が 10 人であり, 上野と淡路の場面の 9 人より一人多くなっており, より動きのある複雑なステップが表現できていると考えられる. 上野と淡路では, 踊りの動きが穏やかになり, 人数が減少したと説明できる.

踊りの詳細について, さらに検討を行う. 片瀬の浜の踊りの 2〜5 では, 足を交互に前に出して, 前に進む動きをしているが, 5 から 6 にかけて, 右足を軸足にし, 左足の膝を前方に振り上げ, 7 で, 前方に振り上げた左足を後ろに振り, 一歩後退するそぶりを見せるが, 8 で再び左足を引き戻し, 9 で左足が軸足になり, 一歩前進する, という変化のあるステップを踏んでいることが見て取れる. 8 から 10, さらに 1 へのループでは, 左右の足が交互に前に出て, 普通のステップとなっている. そして, 先ほど触れなかったが, 1 から 2 では, 交互のステップでなく, 左足を軸足にした変化あるステップとなっている.

淡路の場面の踊りは, 2〜5 までは, 左右交互にステップを踏んでいくが, 5〜6 でステップが止まり, 6〜7 で一歩進むが, その後, 7〜9 でステップが再び止まる. ステップが止まる際に, 片瀬の浜の様に, 膝を前に高く上げたりすることはなく, 膝も全体的の伸びており, 動きは緩やかである.

前報[1] では, 外周の僧侶のポーズのシーケンスにより踊りの振り付けが保存されている事を明らかにしてきたが, 今回, 踊り念仏が時を経る事で, 徐々に穏な動きとステップに変化する様子も, この絵巻には記録されている事が明らかとなった.

5. 結論

一遍上人絵伝に描かれる踊り念仏は, 舞台の上で時計回りに回りながら踊るが, 全身が描かれる外周で踊る 9〜10 人の僧侶のポーズを, 時計回りの順につないでアニメーションすることで, 踊りのシーケンスとして見る事ができる事が確認され, その踊りのステップの特徴を明らかにした. 踊りの動きの激しさは, 時を経ると穏やかになり, ステップも穏やかなものに変化していった. 踊りのシーケンスを動画として保存できなかった当時, 踊りを保存するための方法として, 複数の人物のポーズをつなぎ合わせる手法が用いられ, これにより踊り念仏の時系列の変化も記録されている事が明らかとなった.

参考文献

[1] 荒木宏允, 長沢可也, “国宝『一遍上人絵伝』に描かれる踊念仏の踊りのシーケンスを復元”(2016).

Copyright © 2016 by
The Institute of Electronics, Information and Communication Engineers and
Information Processing Society of Japan All rights reserved.